2006年4月1日

ワタリウム美術館主催の南方熊楠を知る講演会（その1）

プレ講演会 「民族という想像力」 講師 松岡正剛

3月はじめの日経新聞の記事でこの講演会を知り参加した。この講演会は9月まで5 回に分けて南方熊楠をいろいろな角度から探求する。今回はその導入部で、編集工学研究所の松岡正剛所長が民俗学と言う視点から南方熊楠を柳田国男と折口信夫と対比してか解説された。

今回の講演は日本青年館中ホールで開催され約 200 名の参加者があり盛況であった。はじめに主催者（ワタリ女史）からワタリウム美術館についての紹介があり 1990 年スイスの建築家マリオ・ポッタの設計によりワタリ女史の母上様が創設された現代美術館で、現代美術にこだわらず、今回のような講演会を今までに 1000 回以上開催されてきたと言う。

松岡正剛氏は「人類とは何か」、「日本人は単民族なのか多民族なのか」という問いかけから始まり、南方熊楠の世界民俗学、柳田国男の一国民俗学、折口信夫の精神民俗学を対比しながら相互の交流、柳田国男の「遠野物語」、折口信夫の「死者の書」、南方熊楠の生涯や大英博物館における抜筆などについてビデオを交えて判り易い解説された。

遠野物語解説のホームページにも書かれている「長い年月の間、この土地の人々が繰り広げてきた神と自然との交流や人間模様を、歴史・、民俗として伝えることは、未来に生きる者の心の糧となるものと思う。」と言う言葉は異なった切り口の 3 人の民俗学者に共通して言えることであろうと思う。今日、ものすごいスピードで古いものが新しいものへ置き換わってゆく状況を見ると、この辺で一度立ち止まって、古いものの意義（日本人の深層にある意識）を再考してみることが人間の将来を考える上で必要であると強く感じた。

今回のプレ講演会は博学な松岡正剛氏ならではの南方熊楠を知る講演会の解説としてすばらしいイントロダクションとなった。今後の第 1 回～第 4 回の講演が楽しみである。